



近江商人の道中記『木曾日記 二』

著者	末永 國紀, 本村 希代, 奥田 以在
雑誌名	經濟學論叢
巻	58
号	2
ページ	1-22
発行年	2006-09-20
権利	同志社大學經濟學會
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000011016

【史料】

近江商人の道中記 『木曾日記 一二』

末永國紀
本村希代
奥田以在

『木曾日記 一二』（前号）

『木曾日記 二三』は次号以降

凡例

- ・原文には適宜読点「、」を付した。
 - ・原則として常用漢字を用い、人名など固有名詞については原文の文字をそのまま使用した。
 - ・かなは現行のひらがな・カタカナに改めた。
 - ・意味が通じにくいのが原本のままとした時は（ママ）を加えた。
- なお、『木曾日記 一二』の原本は二冊あるので、墨で抹消された部分を含まない、完成度の高い方を正本として採用した。

「木曾日記 二」

出店行

毎歳家を辞して長旅に赴き。幾度か別れを告て東武に下る。山高く水深き中仙道。宿寒く酒薄き木曾の谷。半月を経て店につくといへとも。孰か遠行の疲勞を慰せん。銭湯こみあふて芋を洗ふがごとく。衣服虱を生して糠をちらすに似たり。帳面に向て金銭の出入を改め。算盤を取て相場の高下を考ふ。米穀高うして若輩の大食を歎き。商佃少うして雑費の過分を悲む。風夜高声を聞てハ。火事かと思ふて魂を消し。兩日客なきを見てハ。現金の少きを憂ふ。平旦寒を犯して荷物をころがし。深夜飢を忍んで書出しをか。買物にくれば奴婢といへとも頭をさげて追従をいゝ。仕入に出てハ商人と利を争ふて諍譚をなす。父母老たれども暑寒を訪はず。兄弟離散して音信まれなり。言を寄す上方の百姓衆。日野者の東行を羨むことなかれ。夫農ハ国の根本。殿様より外にこハき人なし。東臯に耕し西野に耘り。御年貢滞りなく皆済すれバ。ミナ鞆丸を握りて正月を待ん。関東兵衛帰国のとき。結城しまの羽織を着。村田張の煙管をひねくりて。東語にはこるといへとも。其營業を見るときハ何ぞ農夫にしかん。このゆへに陶淵明ハ古郷に帰り。白樂天ハ陳村を羨む。古への人猶かくのことし。しかるをいはんや吾徒においてをや

天保七年申八月十八日朝まだきに不破の古関を過りて

あれ過て関もひさしもなければとも影をもらせし月ハ有あけ

旅の暮

家に居て聞だに秋ハかなしきにましてや旅の夕くれのかね

在国わづかに四十日にして又東路の旅に赴く

わくらハに帰りあふ身もいたづらによそかの夢を見し心地せり

神無月再び追分のはらを過りて

色々の花咲し野もけふミれハひとつ草とそかれて寒けし

同 しくれ

浅間山ミねに夕日のさしなから時雨ハわれを追分のはら

天保八年酉正月

あしき事ハさりと申の冬くれてミなよきとしを酉の正月

古郷の母より給ひし歌に

中々にあは、別れのかたからんあハで待こそあふにまさらめ

返し

幾千里隔て、すめど文ミれハまのあたりにそあふ心地せり

富士山眺望

近江商人の道中記『木曾日記 二』(末永・本村・奥田)

假ならハふしの高ねを古郷のは、そのはらにうつし見せてん

虫声

ものおもふ身にきけとてやよもすがら宿ちかくなくむしの声々

搦衣

小夜ふけて衣な打そさらぬたに古郷思ふ宵なるものを

九月尽

冬ハ又めぐり来ぬらんをたまきのいとまこひせで秋ハいにけり

初冬

今来しといはぬはかりに夜あらしの戸に音信て冬となりなき

川の落葉

染なして緋おどし、たる木々の葉のあへなく川に落武者となる

○

秋のすえ冬のはしめにやありけん。おかしき事の侍りしハ。此ころある人の娘の。まだ年若きが。ミめかたちもミにくからず。い

つのはどよりかいと心安くものい、かハシ。来る度たびことによるハしき眼根やもとにて。シバく我方を打詠め。物い、たげの其形容かたち。こハ我に心ありてや。さばかりの男にもあらぬものを。斯かくまでに思はる、ことこそありかたけれど。さすが岩木にあらぬ身の。其人に逢あふことに。鬢びんのをくれ毛けかいあげ。襟えりかき合せなどするに。いよく心ありげに見えしかバ。良節よきせつもがなあれかした。幾夜いくよかひとり物おもひ。よそにハふらぬ小夜時雨こよよときり。戸かどに音信おとづる松風しょうふうも。それかとぞきく遠碓とほつた。妻乞つまごふ鹿かのしのび音ねに。色いろにハ出ださじ悟さとられじと。包つむ袂たもとハ沖おほの石いし。人ひとこそしらね天あまのはら。わたる雁かりかね心こころあらバ。斯かくる思おもひをうき人に。つげの小櫛せきしや鏡かがみとなりて。君か手にふれ君か眼まなこに。ながめられたや帯おびとなり。衣ころもとなりて君か身に。纏まとハれたやと甲斐かひなくも。鳴なの羽はねかき百ももはがき。晝あかつきかけてなく千鳥濱ちどりぎしの真砂まさはや尽つきせぬ思おもひ。其面影おほかげの身に添そて。忘わする、ことハかたうづら。羽はねを双なふる夜もあらハ。互たがひに心を打うつけて。語かたらんものをいか、して。いかなることを先まづいはんと。胸むねをくだくぞ哀あはれなる。

兔うさぎやつげんかくやいはんと長ながき夜よを。あかしかねたる千々ちぢぢの言ことの葉は

むかしのかしこき人だにも。此こゝミちゆへに名なをながし。身をあやまることあるなるに。ましていはんや愚おろかなる。我徒わがらもがのかなしきハ。其ことのみぞ思おもハれて。月つき日も忘わすれいたづらに。つれなきものハ命いのちなり。絶たえなハたえねなからへて。忍しのぶもじすり誰たれゆへにみたれ初はじにし我心こゝろ。狂くるへる駒こまをひき留とどめ。手綱たづなもがなと思おもふうち。ある夜人よるひとなき処ところにて。折をりよくも出逢であいぬれハ。天あまの与あたへとふかく悦よろこび。轟ととくむねをかいさすり。先まづそれとなく四方山よもの。雑話ざつわのうち其人ひとハ。いとせき立たし有あり様さまにて。声こゑをひくうし耳根みみもとにて。わらハ心の願ねがひあり。かなへて給たまふやと。はづかしげに言い出いければ。すハやと身みうちふるへるほど嬉うれしく。何事なにごとにても聞きえ給たまへと。齒はの根ねも合あはず答こたふれば。さらバどうぞ我われに金かねかして給たまハれと。きくよりあきれて茫然ぼうぜんたりしが。忽たちまに釈迦しやくかの明星めいせいを見みえ。二祖にその心こゝろをたづねし心地こゝろして。斯かるたくミのあれバこそ。表おもてばかりの空色そらいろや。ゆるミし帯おびをしめなをし。どつこい其手そのてハ桑くわの弓ゆみ。はりつめし氣きの拍子ひたしぬけ。一息ひといきついてさるにても。真まことの情なさけも見みせずして。心強こゝろごくも金かねかせと。云い出いすことことの早はやきよと。愛想あいさうも爰こゝに尽つきはて、お

かしくも又恨めしく。答もなさで顔打まもり

きぬくその暁にあらねともかねと聞より逃たしにけり

と声高に打吟じ跡をも見ずして走帰り、又つくくと打あんし

かく迄にふかく沈むもことハリや金とらんとの空色の測

右天保八年酉神無月初旬記

歳暮

よきものハ残しもやらでほしからぬしハとしら髪をくれてゆくとし

天保九年戊正月

あら玉の戌のとしほとよる身にも春ハうれしき今朝の薄雪

むつきの末、松栄ぬしのなりハひのために溝沼といふいなかにゆきけるを送る

世の人の情ハふかき溝沼に沈むハうかむはしめにぞある

梅のかけはなれて寒き野道かな 松栄

春風やふたつミつうく堀の魚 春興

春雨や牡丹はたけに心づく 春雨

春興

二上りのうたのでうしも春風のふくべの酒に猶やいさまん

帆のこつく空にうかめるいかのほり霞のふちをこくかとそ見る

寄柳恋

いと柳姿ハ風になびくとも心な余所の花にうつしそ

柳緑花紅

我宿の柳ハよりとりみとりなりほしくも余所の花ハくれなる

惜春

情なく花をちらしてゆく春をつなきとめすや青柳のいと

寄松恋

見る度に思ひハいと、深みとり色そふ松のかけにきてなく

牡丹

諸花のきそへる春にあらそへて心しつかに色ふかミくさ

新樹妨月

夏木立十九点しけれるかどハうは玉の夜ことに月のなき心地せり

月弓のかけを掩へる夏木立矢もとをさじとしける庭の面

追善 題墓の苔

たづぬれハかくる、迄に苔むしてはかなきあとをみるそかなしき

年ふれハ小僧の墓もみとりなる苔衣きて和尚めかせり

同 題蓮

なき人十七点の魂のありかハしら蓮の花のうてなのもとやたづねん

題 忘れたり

うれしさにこぼる涙の玉手筥あけぬうちこそゆかしかるらめ

寄青物恋

物思ふ夜ハ猶いと、長いものつるよりほそくやつる身ぞうき

山の夕立

菅根山ふたへのミのもとをすほと篠をつかねてふれる夕立

蟬

花の頃うたひし山もけふミれハたれも梢に蟬そなくなる

老大人七十一の御賀を祝ひ奉りて

幾秋を君ハ是より渡るらんまれなるとしの数を越てハ

歌ハ古へハうたひしものときくに、今の女わらべのうたふをきけハ、ミそひともしにハあらで四句にして廿六字なり、かの
混本歌のたくひにや試に今やうの歌二三首

牡丹の若芽を愛して

さかぬ今さへ若むらさきの後のいろかハ深ミ草

雨中の牡丹

ものハいはねと色ふかミ草ともにぬれハや雨のくれ

すみれ

色ハやさしき江戸むらさきのおしやいなかにすみれ花

名にしおふ江戸紫の色をもておしくもこゝにすみれ花かな

諸共にぬれハや雨のたぐれに色ふかミ草ものいはねとも

寄衣恋

見るたびに思ひハいと、深川の江戸紫のねすりころもを

養母のミまかり給ひしとて文を得て

ひらくまに涙の露の玉くしけふた目とも見で袖しほりける

愁歎 但し七月廿二日

吹初ていくかもあらね秋風にちるは、き、の露そかなしき

喪中

今ハた、爰にこそあへ天津雁いたくもなきて我な覚しそ

靈前に花を捧げて

露共に捧げてゆかし女郎花のこすむかしの母のおもかけ

九月尽

明日よりハ夕暮ことにいかならんなれにし秋もかなしかりきを

十月むしをきく

秋の野に聞し時たに哀れなるをましてや冬になくむしの声

里の雪

積りてはいづくをそれとしら雪の古郷ちかき道にさへ迷ふ

余所よりも我里にふれうば玉のよるの文よむともし火にせん

秋の末に又東に下りて

登り居てなかもめ尽せど下りてハ又なつかしきミねのもみぢ葉

ひよとりのなく木の下や藍の花 秋日野行

何事もなさでことしも冬至哉 冬至

節分

うてハこそ年にも響け世中に豆なき里の今宵しもがな

歳暮

いそかしく又打よする年波のしからミとなれ我かとのしめ

天保十三年^壬元旦^寅

久方の空しら／＼とみつのえの寅うそむきて春風そふく

雲雀

なくひばりけふのみだるゝいとゆふにからまれもせでをりつ登りつ

春の夜

かき雲り雪気の空のあやなきも梅か香にこそ春の夜としれ

旅の春雨

玉鉦十八点の道のぬかりにすべらしと気を春雨の旅の夕くれ

寄鳴物恋

立寄八てきけバどうやら相夫恋サウフレンこよとはかりにいもか爪音

笛上の音にうらみこそあれつれなくも契りし君はた、ひとよぎり

大暑

堪かたき暑さをいかにせんたくのひとへのきぬのひるまとてなき

残暑

曆にハきぬとさやかに見ゆれとも秋風もなし此頃のてり

増恋

情こそ今ハあだなれつれなくハかく迄物をおもハさらまし

儉約御趣意の名月

桂男の一際目だつ伊達姿江戸近くにハ遠慮しててれ

かくなん吟しけるに暫くして雲掩ひぬれハ

久方の空も御趣意を恐れてや雲間にかくす月の粧

後の月

むしの音も菊の色香も老ぬるに若やきミゆる後の夜の月

同処々に雲あり

此頃の夜寒を月もいとひてや雲の衣をうちまとひつゝ

秋の恋

山鳥^{十三点}の尾の長文や秋の夜にかきも尽せぬ千々の言の葉

時雨

窓^面の戸^十を音信れてふる小夜時雨立出てミれ八月ハさやけし

月の前に契る恋

行すえを掛けて契れハ久方の月や今宵のあかし人なる

雪の朝の別る、恋

ふらハ今ひとしほつもれ朝またく帰る我背のあし跡をけせ

万年青

秋風に清きおもとの色ミれハ時雨に染ぬ松ハものかハ

友なる人より松葉蘭てふ鉢植をもらひて

鉢植をゆくりなく得し嬉しさよとかく果報ハ寝て松葉蘭

辰のとし弥生の頃叔父の追善招かれ、霊前に歌手向けよとあるじの乞ふによりて

花を見て袖こそしはればはかなくもちりしむかしのけふを思へハ

おなし頃うからの追善に招かれて

花ちりしむかしの春にあハねともけふこ、にきてぬる、袖かな

桜井氏の婚礼に歌まいらせよと人にす、められ

植添て色あらたなる桜花こん春ことに咲栄ふらん

この歌まいらせしに、ある人難して婚礼に花ハいむものをといゝしを、又傍なる人、されとも詩経に桃の天々たり、その葉蓂々たりあれハ、花とていむべからず、殊にこん春ことに咲榮ふといへハ、末なかく目出たきうたなりと

藤

いたつらにけふもくらしつ長き日をぶらりと藤のはなに見とれて

野

紫のすみれの春の宵よりも女郎花さく秋の野にねん

草

秋ハむしに宿かしなから旅人をふミ迷ハせる野路の夏くさ

郭公

償おひめきるもずハさなくて杜鵑はたるになどて血をはきぬらん

横さまに矢のことく飛郭公ひと声耳をつらぬきてなく

九月晦日の夜更たけて地震しけれハ

いとま乞せでねし人を地震もてゆすりおこして秋ハいにけり

九月尽

漸と秋ハいぬめり夜あらしの窓うつ音を冬に譲りて

遠近の梢に登る鶯もミぢ去ゆく秋をからみとめずや

梅

やぶれしも其俣をかん吹東風に梅か香通ふ窓の障子は

鉄線

光秀の首うたれしちなみにや桔梗色なる鉄せんの花

先つとし、堂の升形、象の鼻、獅子の頭等買置はべりしに、ある寺の観音堂再建に寄附いたし呉候やう、(マ)構中の衆より頼ミ
にまいられ、其意にまかせ大士に奉るとて

棒げものよしやふるくも南無大悲あらたにまもれ福聚海無量

象はなに数のたからを巻よせて子々孫々に授けたまへや

○

弥生中の五日、なりハひのためによし川より江戸なる方に赴きぬ、ことしハ氣候をくれたれど。けふの空の長閑なる。菜の花のさ

かりにひらき。麦ハミとりの色ふかく。桃のくれなゐにさけば。李ハわれまさりかほに白く。散はつる梅かえに。春おしげに鶯のなき。綻ひかゝる桜のもとに。花まちかほに小蝶の飛。ふじもつくバも霞にたちこめて。それかとも見えわかず。遠近の物もふでに。行かふ人のさらびやかなる。ミるもの間ものミな春ならぬハなし、つらくをのか姿をかへりミレバ。木綿布子の裾はしおり。大きくしるし付たる風呂敷てふものを背おひ。泥にしミしわらしをはき。世にある人にくらぶれハ。見るかげもなきありさまなれど。よしや形谷こそともかくもあれ。花になく鳥水にすむ。蛙も歌をよむときく。生としいけるもの。孰か敷嶋の心なからん。いでやわれもうたよまんと。腰のやたてを取出して

久方の光り長閑き春の日にしづ心にてたにしはひだす

遅々たる春の日も漸にくれそめて、入相のかねと共に鳥ハねくらに帰り、家々に灯火をともせハ、上総あたりの山か海か霞の間より月かけのさしのほる頃、わりなき友にいざなハれ、この頃深川にかりたくてふものあり、八幡の神にまふでがてら、いでや見てこんと、よかしとす、むる言葉にしたかひて、跡べにつきて行ほとに、先永代のこなたにて、夜鷹てふものを見るに、霞のすあやしげに引まハし、ちかよる人を引とむ、こハ上方にて辻君といふものなり

もしくとい、さま袖をかいつかミ夜鷹ハおのがすのうちへ引

其値千金ときく春の夜も廿四文ですます辻君

さらぬだに心うきたつ春の夜に。空ハ霞めど望月の。かげにうかれて名にしおふ。かの仮妓家に来て見れば。聞しに勝る容光にて。

兒夫の叫ぶ声ハ永代の橋に轟き。唱女のひく三絃ハ二階の障子に響く。居並ぶ妓婦ハ簪釵さしたる菩薩かと疑ひ。悪言す鳶匠ハ鉄棒遺れし鬼卒かと怪む。蘭麝芬々として鼻を穿ち。唱歌嫋々として耳を清す。酒ハ清く魚ハ鮮し。駕輿あり舟あり。団餅あり。鮮あり。若女あり年増あり。肥たるあり瘦たるあり。艶書をかくあり。欠するあり。心に欲するもの。求めに應じてあらずといふことなし。凡人間の歡樂此郷を去て又あるべしとおもほえず

月ハはれ桜ハ笑ふ深川に雪の肌のうかれ女を見る

極樂ハいつくのほど、思ひしにおいらならば飯宅の見世

更たけて帰りはべりぬ

ある老人の茶の筥を求めてこれにうたかきてくれよとこふによりてつれくをたがなくさめん草と木の中の人こそ老の友なれ

ある人むし菌にてつよくなやミまじないくれよと頼ミけれハ、よしく心得はべりぬとて野に出なバ木の葉草のはおほうるになど人のはをむしのくふらん

かくかきて是をいたむ菌にてかミ、草木多き所にたて置べしとい、てやりけるに、何の音信もなかりしゆへ、程過てたつねけるに、更にしるし見え侍らず答へき 大笑

藤岡日記

神無月はしめに。毛の国藤岡までまかるとて。よし川を立出て。岩棚^{いわだ}あたりにきて。遠近をなかめやれば。冬の日なから暖にて。咲残る籬の菊のいと哀れに。天津雁の折しりかほに鳴渡るもおかしく。四方の梢^{たけ}ハ色々に紅葉して。さなから錦もて木々を纏^{まと}へるがごとく。米つけてゆく馬子^{まご}のうたハ。木からしにつれて耳をつらぬき。麦圃^{むぎほ}にひく糞^{こ糞}の香^かハ。初^もからの煙^とと共に鼻^{はな}を襲^{おそ}ふ。空はれて塵^{ちり}ほどの雲もなく。山遠くして峯^{みね}に雪あり。落葉かくわらべハ秋の名残^{なごり}をおし。芋洗^{いも}ふ女ハ冬の色をなつかしむ心なき身もけふの気色^{けしき}を見て。いかで哀^{あは}れを催^{もよほ}ささらんや

立とまり日のみじかきも打忘れうたよまんとて気を紅葉哉

夕日^{ゆふひ}てるけふの紅葉の色ミレハ花も若葉も雪も物かハ

気色にみとれて道^{みち}はかゆかず。原市まできぬれば。日ハすでに西に沈^{しず}ミ。せんかたなく餅屋^{もちや}といへるに宿^{しゆく}かりぬ

黄昏^{たそかれ}に杵^{きね}のやふなる足^{あし}をもて。やつとついたる餅屋^{もちや}てふ宿

朝まだく立出て落葉ふミわけをちこちをミテ

空青く杵^{きね}むら黒く菊黄色赤き落葉に白うをく霜

やがて中仙道の大路に出、や、日もかたむく頃吹上ケといふ所につきて

色々の紅葉吹あけふきおろし夕日に錦もて遊ぶ風

其夜ハ熊谷の駅松坂屋といへるに宿かりぬ。多くの旅人の泊りしをミテ

霜がれの冬の夕へも賑ふハこれ常盤木の松坂やかな

次の日熊谷を立出。本庄より中仙道をはなれ。猶山道をわけゆきつゝ、

鹿ぞなくおく山ミちハいかならんこゝも紅葉をふめハかなしき

むさしと毛の国の境なる神奈川に出ぬ。仰けバ大空ハ藍もて染たるがごとく。顧れハ秩父山ハ盤して彫れるかと疑ふ。立て詠むれとも尽ることなく。座して嘯けどもとがむる人なし。川原広うして草ごとく枯れ。水寒うして魚さらになし

削りくずちらすかと見る枯尾花かな川原の風のまに〜

日のかたふく頃藤岡に着ぬ

草臥てあしもすゝまずぶらくとさかり日の頃藤岡にきつ

右嘉永元年申十月記

印

印